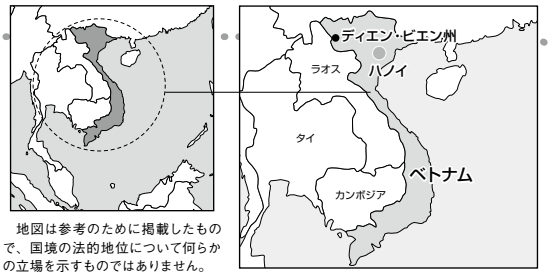
ユニセフ子ども物語
地球に生きる子どものくらし

Socialist Republic of Viet Nam

ベトナム社会主義共和国



地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

必要なのは継続的な支援

笑顔を失ってしまった少年

ムアズンくんは、ベトナムのディエン・ビエン州に暮らす13歳の少年です。おばあちゃんに話しかけられてもずっと下を向いていて、食事をする時も学校に行く時もいつも元気がありません。ムアズンくんのお父さんは、ムアズンくんが4歳の時に病気で亡くなり、その3年後、お母さんは再婚して家を出て行ってしまいました。今は、おばあちゃんとおじさん家族7人と一緒に山の中の小さな小屋で生活しています。9人の生活を支えているのはおじさん夫妻のわずかな収入だけです。庭でお米を育てていますが、土地がせまく、十分な量はとれません。昨年までは次の収穫までに足りないお米を政府が無償で支給してくれていましたが、今年はその支給を受けることができなくなりました。ムアズンくんの暮らす地域の家庭はどこも貧しく、より収入の少ない他の家庭に支給が回されることになってしまったのです。

おばあちゃんの願い

現在、ムアズンくんは中学1年生。近くの中学校に通っていますが、いつもお腹はからっぽです。「息子は自分の子どもたちに食べさせるだけでも精一杯なのに、私とムアズンも養わなければなりません。彼らは本当に一生懸命働いていますが、子どもたちのお腹を満たしてあげられるような収入を得ることはできません。」ムアズンくんのおばあちゃんのカンティーサさんは言います。「ムアズンはいつも悲しそうな顔をしていて、あまり喋らないので何を思っているかもわかりません。何かの病気でないことを祈りますが、もしそうだとしてもどうしたらよいのでしょう。お金のことを心配せずに、このまま学校に通い続けていっぱい勉強をしてもらいたい、そして将来は自分の好きな仕事についてほしいです。」

希望をつなぐ支援

ユニセフが支援をする子どもの保護センターでは、ソーシャルワーカーが家々を個別に訪問、厳しい環境にいる子どもがいないか調査し、支援が必要な場合には政府に報告を行っています。ムアズンくんの家にも調査が入り、里親家族への支援として、月に9ドルの現金支給と無料の保健サービスを、ムアズンくんが18歳になるまで受けられるようになりました。もう学校に通えなくなってしまうという心配はなくなり、思う存分勉強をすることができます。ムアズンくんのように厳しい環境に暮らす子どもが他にもいないか、センターはこれからも調査活動を続けていきます。

<文・構成：（公財）日本ユニセフ協会>

物語の国
ベトナム
社会主義共和国

ベトナムは、インドシナ半島東部に位置する南北に細長い国家で、日本と同じくらいの面積に8,785万人程が暮らしています。人口の約86%をキン族が占め、残りは53の少数民族からなる他民族国家です。少数民族はそれぞれ華やかな民族衣装や独自の言語などの伝統文化を守りながら生活しています。

©日本ユニセフ協会
タイ族の女の子

少数民族の子どもたちへ支援を行き届かせるために

1970年代は世界10位に入る貧しい国だったベトナムは、1986年のドイ・モイ（刷新）政策導入を機に、過去20年の間に急速な経済成長を遂げました。この20年間で国全体の貧困率は58%から14%に減少、5歳未満死亡率も大幅に減少し、MDGs(ミレニアム開発目標)もほとんどの分野で達成されると予想されています。しかし、急激な改善がみられているのは多数民族であるキン族が多く暮らすハノイやホーチミンといった都市部に限られ、少数民族が多く暮らす山間部では未だ電気も通らず適切な衛生施設を持たない家庭も多くみられます。

©日本ユニセフ協会
首都ハノイの様子

©日本ユニセフ協会
山間部の風景

物語の舞台、ディエン・ビエン州は、最も貧しい州のひとつです。ハノイから飛行機で1時間ほどの、中国・ラオスとの国境に近い山間部に位置し、異なる文化・言語を持つ21の民族が暮らしています。人口は、50万人弱ほど、その約半分は18歳未満の子どもです。国の発展から取り残され、なおも厳しい生活を強いられているこの地域の課題とユニセフの活動をみていきます。

©日本ユニセフ協会
モン族の女の子

ベトナムの子どもの状況
－ディエン・ビエン州とベトナム全国平均との比較－

項目	ディエン・ビエン州	ベトナム全国平均	出典
5歳未満児死亡率（1,000人中）	62,2	24,1	GSO,Census (2009)
改善された水源を利用する人の比率（%）	29,9	86,7	GSO,Census (2009)
適切な衛生施設を利用する人の比率（%）	17,8	54,0	GSO,Census (2009)
児童婚（%） 男子 15-19歳 / 女子 15-17歳	男子 14,4 / 女子 17,5	男子 2,2 / 女子 3,1	GSO,Census (2009)
初等教育学校純就学率（%）	男子 90,4 / 女子 86,8	94,9	GSO,PCFPS (2010)
中等教育学校純就学率（%）	男子 69,2 / 女子 57,5	81,9	GSO,PCFPS (2010)
若者（15歳以上）の識字率（%）	男性 76,5 / 女性 50,6	男性 95,9 / 女性 91,6	GSO,PCFPS (2010)

出典：GSO（Generral Statics Office），Census（Viet Nam Population and Housing Census），PCFPS（Population Change and Family Planning Survey）

■ 厳しい環境にいる子どもを見つける

ディエン・ビエン州政府が発表した子どもの保護プランによると、州内で1,700人の孤児を含め、約1万人の子どもたちが特別な保護を必要としています。

政府は孤児や両親を失った子どもを養う里親家族に対して社会福祉支援ならびに現金支給を行っています。しかし、コミュニティにおけるソーシャルワーカーの数が圧倒的に不足していることに加え、出生登録をされず法律的には存在していない子どももいるため、どの家庭にどのような子どもがいるのか把握するのは困難です。

ユニセフは、国家プログラムで以前成功をおさめた、コミュニティをベースとした子どもの保護事業の経験を活かし、州政府と協働し、子どもの保護に関する法律整備やソーシャルワーカーの育成に努めています。訓練を受けたソーシャルワーカーは各家庭をまわり、どの家庭にどのような子どもがいるか調査・評価をします。そして、集めたデータを政府に報告し、政府の承認が下りた家庭は月に約9ドルの現金支給と無料の保健サービスを、子どもが18歳になるまで受けることができます。

©日本ユニセフ協会
ソーシャルワーカー

■ 慢性的栄養不良からの脱却

ディエン・ビエン州では、慣習的な理由と保健センターへのアクセスの悪さから、自宅で出産をする女性が多く、乳幼児死亡率は都市部の2倍を上回っています。また、子どもの3人に1人は栄養不良で、同じ年代の子どもに比べて身長も体重も足りていません。保健センターではヘルスワーカーによる問診と、栄養士による栄養セミナーを開催しています。栄養士は子どもが摂取すべき食事やその代替品、調理方法などを、実際に調理をしながら小さい子どもたちを抱えた母親たちに向けて説明します。栄養士の説明はベトナム語で行われるため、ベトナム語から現地語に通訳を介してレクチャーが行われます。

©日本ユニセフ協会
栄養士の話を聞く母親

■ 少数民族を尊重した学校づくり

ベトナム全体の識字率が98.3%であるのに比べ、ディエン・ビエン州では63.3%、特に女子に関しては50%と低く、女子は教育を受けなくてよいという慣習がいまだに根強く残っています。少数民族の子どもたちが通う学校は、多数民族であるキン族出身の教員がベトナム語で行う授業が多く、授業の内容がわからず落第や退学をしてしまう子どもが多くいます。そこでユニセフは、共通語であるベトナム語と少数民族固有の言語によるバイリンガル教育を強化しており、その必要性を政府にも訴え、教師のトレーニングなどを協働して行っています。

©日本ユニセフ協会
子どもに優しい学校での授業

また、少数民族の子どもたちが自分たちの文化に誇りを持ち、自分に自信を持てるよう、“子どもに優しい学校”の設置を進めています。“子どもに優しい学校”では、グループ討論・発表を行う中で主体的に考え、意見を発表し合い、異なった意見も尊重する大切さを学ぶことができます。既に退学率の改善が見られた地域もあり、今後も教師のトレーニングなどに力を入れ、“子どもに優しい学校”の設置をさらに推進していきます。